

# Clinical Impact and Risk Factors for Skeletal Muscle Loss After Complete Resection of Early Non-small Cell Lung Cancer

高森, 信吉

<https://hdl.handle.net/2324/1931815>

---

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

|        |  |      |    |    |    |
|--------|--|------|----|----|----|
| 氏名     | 高森 信吉  |      |    |    |    |
| 論文名    | Clinical Impact and Risk Factors for Skeletal Muscle Loss After Complete Resection of Early Non-small Cell Lung Cancer |      |    |    |    |
| 論文調査委員 | 主査   | 九州大学 | 教授 | 中西 | 洋一 |
|        | 副査   | 九州大学 | 教授 | 中島 | 康晴 |
|        | 副査   | 九州大学 | 教授 | 萩原 | 明人 |

### 論文審査の結果の要旨

担癌患者において、骨格筋量により診断されるサルコペニアと予後不良の関係が近年報告されている。申請者らは、早期非小細胞肺癌患者における、術後骨格筋量減少の臨床的意義を明らかにすることを目的に本研究を実施した。

2005年から2010年の間に九州大学病院にて病理病期I期の非小細胞肺癌と診断され、術前および術1年後のCT画像が存在し、肺葉切除を受けた患者101名を対象とした。骨格筋量の術後術前比は、術後の第12脊椎レベルの傍脊柱筋面積 ( $\text{cm}^2/\text{m}^2$ ) を術前のもので除して定義した。

31名(30.7%)が骨格筋量減少群に分類された。解析の結果、1)骨格筋減少群では、活動度(Performance Status; PS)が有意に低いこと、2)骨格筋量減少群では、無病生存期間及び全生存期間が有意に短いこと、3)骨格筋量減少は、無病生存期間及び全生存期間の独立した予測因子であること、が示された。また、活動度低下( $\text{PS} \geq 1$ )と閉塞性換気障害( $\text{FEV1.0\%} < 70\%$ )が骨格筋量減少の独立した予測因子であることが示された。

申請者らは、早期非小細胞肺癌患者において、術後の骨格筋量減少は、予後と有意に関係していたことより、PSの低下した患者や閉塞性換気障害を有する患者においては、術後の骨格筋量を維持できるように慎重なサポートが必要であると述べた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが概ね適切な回答を得た。

なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。